＜株式会社エフエム東京　第 499 回放送番組審議会＞

１．開催年月日：令和 5 年 6 月 6 日（火）

２．開催場所：エフエム東京 11 階大会議室

３．委員の出席：委員総数 6 名（社外 6 名　社内 0 名）

◇出席委員（3 名）
佐 々 木 俊 尚　委員長代理
山　口　真　由　委員　　柴　崎　友　香　委員

◇欠席委員（3 名）
ロバート キャンベル　委員長　　秋　　元　　康　委員
松　田　紀　子　委員

◇社側出席者（8 名）
唐島 夏生　代表取締役会長
黒坂 修　　代表取締役社長
小川 聡　　取締役
内藤 博志　執行役員編成制作局長
延江 浩　　編成制作局ゼネラルプロデューサー
宮野 潤一　編成制作局次長 兼 編成部長
若杉 健太　編成制作局制作部長

◇社側欠席者（0 名）

【事務担当　内藤放送番組審議会事務局長】

４．議題：番組試聴　（約 30 分）
特別番組『Street Fiction by SATOSHI OGAWA』
2023 年 4 月 16 日、23 日、30 日（日）5：30～5：55　放送のダイジェスト

≪議事内容≫
議題 1:最近の活動について

■2023 年 4 月度　聴取率調査結果
　ビデオリサーチ 2023 年 4 月度の首都圏ラジオ合同聴取率調査結果を報告します（調査期間：2023 年 4 月 17 日～23 日）。
　今回の調査においても当社は好調を維持し、全日 6:00～24:00 の週平均において、コアターゲット【男女 18～49 才】、【男女 12～59 才】、個人全体を示す【男女 12～69 才】の主要 3 区分において、すべて単独首位を獲得することができました。

　◎【男女 18～49 才】　単独首位
　◎【男女 12～59 才】　単独首位
　◎【男女 12～69 才】　単独首位

　コアターゲット【男女 18～49 才】と【男女 12～59 才】区分が昨年 22 年 2 月度から 8 期連続首位、個人全体区分の【男女 12～69 才】では昨年 4 月度から 7 期連続での首位（同率含む）を継続しています。
　さらに細分した年代区分で見ても、【男女 30 代】、【男女 40 代】、【男女 50 代】、【F1（女性 20-34 才）】、【M2F2（男女 35-49 才）】、【M2（男性 35-49 才）】でいずれも首位を獲得しており、コアターゲット層を中心に幅広い世代で高スコアを得たことが主要 3 区分での単独首位に繋がっています。今後も、引き続き在京トップを継続するとともに、各番組の内容強化ブラッシュアップ、新規リスナー獲得に向けて、一層注力してまいります。

議題２：番組試聴

【番組名】

特別番組『Street Fiction by SATOSHI OGAWA』

2023 年 4 月 16 日、23 日、30 日（日）5：30～5：55　放送のダイジェスト

【番組概要】

本日ご試聴いただくのは、4 月 16 日、23 日、30 日（日）に放送した『Street Fiction by SATOSHI OGAWA』のダイジェストです。

この番組は、4 月にスタート。直木賞作家・小川哲がパーソナリティをつとめ、リベラルアーツをコンセプトに、ゲストとの対談、本の音声レビュー、シンポジウムやイベント等のレポートなど、さまざまな気付きを、番組を通じてお届けする早朝思索番組です。

ご視聴頂く 4 月 16 日、23 日、30 日の放送回では、4 月 13 日に発売した村上春樹の新刊『街とその不確かな壁』について、書評家の長瀬海をゲストに招き、おそらくどこよりも早い“最速音声書評”としてお届けしました。

【委員の意見および社側説明】
（「○」委員意見／「■」社側意見）

○小川哲氏は話が面白く上手なので、ラジオにピッタリだと思う。話も聞き取りやすいのと、小説の批評的な解説と個人的な思い入れ、例えばこういうところが好きです、というような話のバランスが取れていると感じた。面白い小説を書く人は読み手としても面白い視点を持つ優れた読者だと思うが、小川氏はまさにそういう方というのが番組で活かされている。

○この回は、村上春樹氏の新作の書評ということで、その話をじっくりしていましたが、作家本人がいないほうが作品の話をじっくりできるというのは発見でした。書評家の長瀬海氏がゲストで、これまでの村上春樹作品だとか、今回の作品だけじゃなくていろいろな視点で話を聴けたのが良かった。今週放送されていた回もオンエアで拝聴したが、直木賞作家の千早茜氏本人がゲストに来ていて、もちろん作家本人の話が聴けるという面白さはあるが、どうしても作家本人のキャラクター的な話とか、普段のエピソードが中心になるので、じっくり小説、作品そのものの話ができるのは貴重な機会だと思った。また、それは村上春樹氏という時代を超えて多くの人に読まれている作家だからこそ可能なことだとも感じた。

○番組冒頭から「マジックリアリズム」という言葉が何回か出てきて、それが、長瀬氏と小川氏とで見解も分かれていて、話は面白かったけれど、もう少し早い段階でマジックリアリズムとは何なのか、解説があったほうが分かりやすかったとは思った。

○本や小説とラジオと音声メディアはすごく相性がいいと思う。ポッドキャストでも最近はいろいろな方が本について話す番組を配信しているが、プロというか、専門家の場合は充実度・密度が高くて面白さが違うなと実感した。放送しきれなかった部分は「AuDee」でも聴けるというのも良かった。今後本や小説に関する音声番組は可能性があると思うのでこれからも番組を楽しみにしている。

○面白く拝聴した。個人的に村上春樹作品は読んでいないのだが、この番組で極めて知的で教養の高い 2 人が村上春樹氏について熱を込めて語るというのが、村上春樹氏にはこのような魅力があるのだと、伝わってきた。彼らは 2 人とも競うように村上春樹氏との関係の深さ、自分の読み方、どれだけ自分が早く小説を読んだかみたいなことを言っていて、それは村上春樹氏が好きだというよりも、「私は村上春樹を理解する人間です。」という、ある種自己表現の手段のように感じ、その部分が新しい発見で面白かった。また、そのようにさせる作家であることが、まさに村上春樹氏をこれだけ世界的な名声に位置づける所以なんだろうということを理解できた。

〇私もまだこの本を読めていなくて、読んでいない人間からすると、マジックリアリズムの話はなんだかよく分からない。読んでない人にもう少しわかりやすく、何を持ってして村上春樹氏のマジックリアリズムが変わったのかみたいなところを話してもいいのかな、とは思ったが、よくよく考えると、ここで小川氏らが話しているのはほとんどアイドルの推し活のようなものだと思う。いかに早いナンバリングのものを読んだとか、日本で一番早く読むんだとか、出版社から書評を頼まれても断って、新潮社一本とか、そういうことを言っているのが推し活そのもので、気持ち悪いくらい、それは悪い意味じゃなくて、気持ち悪いのが逆に気持ち良いというか。この番組は別に読んでない人に向けて広く放送していなくて、読んだ人同士、この本について推しましょう語りましょうという構造になっている。これは、ラジオ番組だから成立している。テレビでは難しいかも知れないが、ラジオというパーソナルなメディアではありだと思う。

〇番組の内容とは離れた話になるが、今の新進気鋭の直木賞作家がこれだけ村上春樹氏を褒めちぎっているところが不思議な感じがした。私は 80 年代 90 年代の村上春樹作品がすごく好きでたくさん読んでいたが、あの時代、私の記憶では、日本の文壇から村上氏は嫌われていた。あまり正確な記憶ではないが、日本の戦後文学は日本の土着な民族意識とか、そういうものを深く掘り下げよ、というような、あるいは、社会を重苦しく鋭く切るというような、そういう感じがあり、それに比べると、80 年代当初から登場してきた村上春樹氏は土着でもなんでもなく、重苦しくもなく、非常に軽やかでかつポップカルチャー寄りで、こんなもんは純文学じゃない、大衆文学だと、というようなことを言われていた。それに対して村上春樹側は、「いや別に僕は純文学・大衆文学なんか分ける気はない、単なる小説家です」と言っていて。そのあたりから亀裂が広がったのか、村上氏はほとんど日本の文壇とは交流がなく、文芸誌にも登場せず、アメリカに移り住んだりして、日本の文壇とは距離を置いた形で存在していた。90 年代後半に小説家たちが、やっかみだと思うが、こぞって嫌いだと言っていた。これが、2000 年代になって、世界的にも評価されることが日本にも伝わってきて急激に変わってきた。一方で小説文芸の世界でも世代交代が進んだことで、ある程度新しい評価軸が生まれてきたこともあると思う。これは今の日本のアニメともオーバーラップする。最近だと、「ザ・スーパーマリオブラザーズ・ムービー」がアメリカで大ヒットして、それが任天堂の映画。「すずめの戸締まり」とかもアメリカで大ヒット。「THE FIRST SLAM DUNK」とか「ONE PIECE FILM RED」も世界でヒットしていて世界的に評価される局面に入ってきている。もともと日本の映画界ってアニメを一貫してバカにし続けてきたという経緯もある。例えばキネマ旬報という非常に古い老舗の映画雑誌の「キネ旬ベスト 10」はアニメを一切入れない。ところが日本の実写映画、キネ旬が好きそうな実写映画っていうのは、どんどん没落している。もちろん是枝裕和氏という優秀で素晴らしい監督もいるが、全体としてはあまり（観客に）観られなくなって、斜陽産業になってしまっている。その中でアニメだけがどんどん国

際的評価を高めている構図になってきて。これって、まさに 80 年代 90 年代の村上春樹氏だよねと。結局、映画でも文学でも日本って主流になるところはどんどん硬直化して、世の中から離反していく。その狭いインナーサークルの中で、文壇とか映画業界のところで生きていくみたいなことが起きてきて、大衆社会と乖離していくっていうことが起きる。新しくて素晴らしいコンテンツは、古い文壇的メインストリームじゃなくて、より辺境みたいなところから生まれてきて、それが世界的に評価される。そういうある種の流れみたいなものがあるのではと、村上春樹評価とか最近のアニメ評価みたいなのを見ていると感じていて、それも含めて、今の作家が村上春樹氏推し活している面白さも感じた。

■大変参考になる意見を頂戴した。今後に活かしたい。
　1 つのエピソードを紹介しておくと、村上春樹氏を語ってほしいと依頼した時に本当に多くの作家からお断りを頂いた。カラーが付いてしまうと。そんな時に小川氏に引き受けていただいたということがある。

6.議事内容を以下の方法で公表した。
①　放送:番組「ドライバーズインフォ」
6 月 24 日（土）5:55～6:00 放送
②　書面:TOKYO FM サービスセンターに据え置き
③　インターネット:TOKYO FM ホームページ内 https://www.tfm.co.jp/